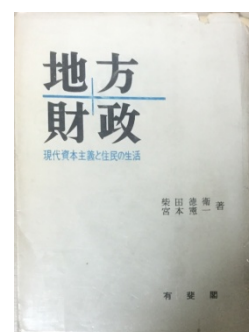


## 柴田徳衛先生の思い出

昨日、柴田徳衛先生ご逝去の悲しい知らせが届いた。先生は1924年に東京都生まれ、東京都立大学教授から東京都企画調整局長、東京都理事兼公害研究所長などをへて、東京経済大学教授で教鞭をとられた。『現代都市論』をはじめ数多くの著書を刊行され、わが国の都市研究の第一人者であり、都市行政家としても活躍された。

柴田先生との最初の出会いは、たぶん宮本憲一先生との共著『地方財政』有斐閣だと  
思う。写真の本は1969年初版7刷であり、70年9月に買ったと記してある。信州大学4年のときで「進路」に悩んでいた頃だ。本書を読んで地方財政に興味をわき、わたしの研究教育「人生」に大きな影響をあたえた。



本書を読んだとき、1962年9月に書かれた「あとがき」に注目した。「本書は兩名の完全な討論と協同同時執筆によるものである。……現在の交通事情では、まだ東京と金沢の時間的距離は、ヨーロッパと東京より遠いほどである。その間をここ数年、さらに本書計画後、毎月のようにいやそれ以上に互に往来した。」まだ新幹線もない時代である。本書の成り立ちを知るとともに、共同研究・共著というものを学ぶことができた。

柴田先生には学会や研究会などで、多くの示唆と刺激、元気をもらった。なかでも忘れられないのが、日本生命財団助成による共同研究である。写真は1985年4月に東京で開催されたシンポジウムの報告を21世紀の大都市像として、とりまとめたものである。研究会代表の柴田先生は序章「新しい日本のありかたをもとめて」を執筆されている。



私も第2章Ⅲ「産業構造の変化と『成熟都市』大阪の財政問題」を執筆している。大阪研究の共同研究の成果を国際シンポジウムで報告し、それをとりまとめた論文である。初めての国際シンポジウムでは、たいへん緊張して報告したが、柴田先生から温かい言葉をかけてもらった。

先生の講演を最後にお聴きしたのは、2011年に大阪で開催された「東西の学者が語り合う2.11シンポジウム」であった。『大阪都構想』を越えて一問われる日本の民主主義と地方自治」というシンポジウムであり、柴田先生は東京から見る「大阪都」問題と題して報告された。いつもの先生らしい調子で、東京の歴史と現実からみて、「大阪都」なるものが、いかに問題の多い構想かを鋭く、わかりやすく指摘された。

柴田先生の名著に『東京—その経済と社会』岩波新書、1959年がある。あとがきに「日本全体の動きのなかからいま一度理論的に東京を把握し直してみたいと思った」と書かれている。シンポジウムのあと、この名著を読み返し、続編を期待していた。

(2018年5月21日)